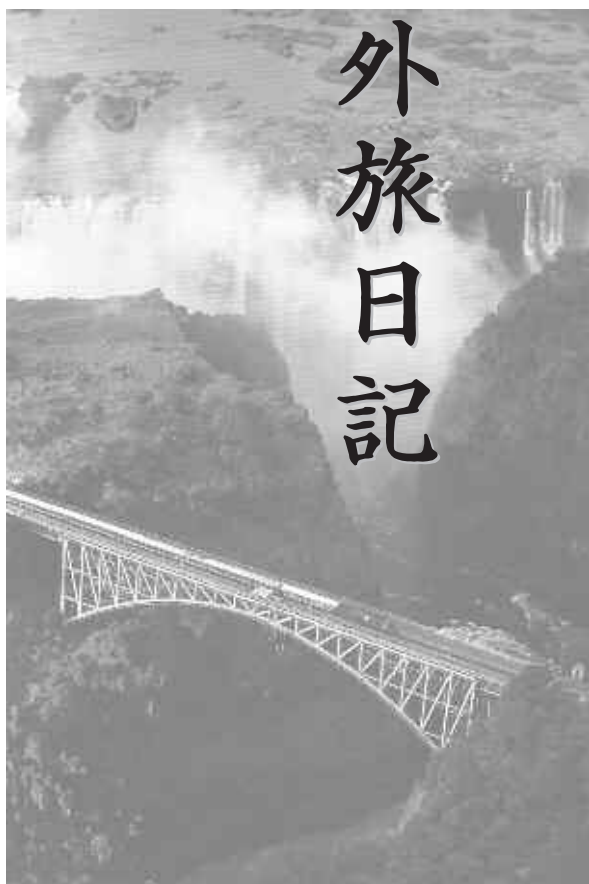


私の海外旅日記

繁田正和



はじめに

年を取るにしたがい記憶力がとみに衰えていくのを自覚する。

若い頃は興味あることについては特に努めなくても頭に入り、それが記憶から消え去るとは思いもよらなかつたが近年は興味あることで記憶に留めようと努めるにも拘らずなかなか頭に入らず、入ってもしばらく使わないと光陰矢の如く記憶から消えていく。

今から八年程前エジプトを旅行した際にご一緒になった方からその際の素晴らしい旅行記を送って頂き、楽しかった海外旅行の思い出を少しでも長く保つために記憶の未だ覚めやらぬうちにこれらの旅について日毎に記憶を辿る日記の形で書こうとの気持ちになり、南米旅行を皮切りにその後の海外旅行の都度一文を旅日記の形で書いてきた。

その様にして書き進むにつれ「あれはどうだったか?」、「あれは見過ごしたのでは?」と後で悔やむことが多い、それらを少しでもなくすため旅の前に色々調べて行くようになった。

その様にするにつれ何れの旅もあつというまに過ぎ、しかも旅の前に色々調べ楽しむ、調べたことを実感として味わう楽しさ、旅の後その思い出を懐かしみながら旅日記を書く面白さが解り、さらにそれが次の旅へと誘うと言う状況を生み今日に至っている。

さらにこれらの面白さが嵩じ、今では南米旅行以前の旅行についても臚げになった記憶と美術遍歴の際に書き留めたノートをもとに時間の許す限り書き留めるよう努めている。

これら旅日記がいつの間にか溜りに溜り、この際本にでもしたらとの思いに至り取りかかってみると、これら全てを本にすると何と通常の本にして五、六冊にもなることが判り、これら全てを本にすることは諦め、せめてこれら旅日記の中から私の海外旅行の様が少しでも解って頂けるよう旅日記を書き始めてからの中からもかく十編を選び、これまでの私的な海外旅行の全てについてはその旅行年月、訪問地、その都度訪れた美術館等を巻末に載せなんとか一冊の本に取りまとめた。

私の海外旅行は、

① 誰もが抱くであろう「広い世界を出来るだけ見て見たい」との旅への憧れ

② 若い頃からの西洋文化への憧れ

③ それら西洋文化への憧れの中でもとりわけフランスやイタリアを旅行しているうちに高じた西洋美術への憧れ

④ とりわけそれら西洋美術の中でもルネッサンス美術に対する憧れ

⑤ さらに定年後大阪大学・大学院で学び、新たに興味をもった東洋美術、東洋文化に対する憧れ

これら五つの憧れが概ね常に伏線になって進行しているが、このうち③④⑤に関する記述は些か専門的になりこれらにあまり関心を持たれない方には少々マニアックな、またくどいと思われるかも知れないがご容赦頂きたい。

以上真に拙い文章ですが余暇の慰みとしてご一読頂ければ幸甚である。

▼目次▲

●はじめに

- I、南米三カ国（アルゼンチン、ブラジル、ペルー）・ロサンゼルス周遊の旅……………5
（二〇〇三年十一月二十八日～十二月十二日）
- II、イタリア・ルネッサンスの画家達（ピエロ・デッラ・フランチェスカ等）の……………38
画を尋ねての旅（二〇〇四年一月二十九日～二月八日）
- III、「サファイア・プリンセス」クルーズによるニュージーランド……………94
オーストラリア周遊の旅（二〇〇五年一月二十八日～二月十二日）
- IV、ドイツ・ルクセンブルグ・ベルギー・パリの美術等鑑賞・周遊の旅（二〇〇五年九月六日～十六日）……………136
- V、南極クルーズとアルゼンチン・チリ周遊の旅（二〇〇六年一月二十六日～二月九日）……………176

VI、フランス・ワイン街道の珠玉の村と街を巡る旅 (二〇〇六年六月六日～十四日) ……………	209
VII、南アフリカのブルートレインとビクトリア瀑布、サファリの旅 (二〇〇七年七月十九日～二十八日) ……………	239
VIII、インド・ネパール・ヒマラヤ周遊の旅 (二〇〇八年一月十七日～二十七日) ……………	263
IX、アメリカ・シリコンバレー・サンフランシスコ・ヨセミテ・ニューヨーク・ バークシャー地方・ボストンを巡る旅 (二〇〇八年五月二十四日～六月六日) ……………	290
X、西安・敦煌・シルクロードの旅 (二〇一一年八月二十一日～二十七日) ……………	334

● これまでの海外旅行一覧

● おわりに

I、南米三カ国（アルゼンチン、ブラジル、ペルー）・

ロサンゼルス周遊の旅（二〇〇三年十一月二十八日～十二月十二日）

十一月二十八日（金）

伊丹発全日空便で羽田に向け出発、到着後リムジンバスで成田に向かう。沿道の東京の変化に驚いているうちに成田空港第一ターミナルに着くが、以前仕事で鹿島に行く際に八重洲口から利用していたバスに比べあまりの早さに驚く。

十九時ヴァリグ・ブラジル航空便はロサンゼルス経由サンパウロに向け出発、夜が明けるとロサンゼルスの景観が眼下に見えるが、ロサンゼルスの街は何処までもフラットに広がり、街の規模の割りには中心街が小さいが街の中心部近くにゴルフ場が二つ見えたのには驚く。

ロサンゼルス空港での入国手続きに随分と時間を取られ、休む間もなく再搭乗したが、今度は満席で席の移動が出来ず、翌朝七時過ぎサンパウロに到着。

サンパウロ空港は近代的で明るくゆつたりとして通路に器具を出してマッサージの営業をしているのには驚く。

十一月二十九日（土）

再びヴァリグ・ブラジル航空便に乗り約二時間四十分後の午前十時半ブエノスアイレス空港に無事着陸、伊丹を出てから実に三十二・五時間を費やしたことになる。空港はサンパウロ空港に比べ活気がなく、設備もやや古い。

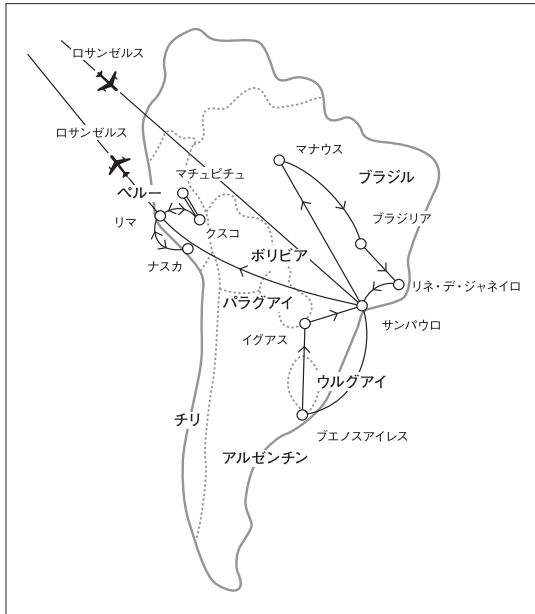
プエノス・アイレスとはスペイン語で「いい空気だ」との意味、また航海の神様・聖プエノスアイレスに因むとも言う。

空港にはガイドの私より少し年配の上品な日系女性Kさんが出迎え、彼女の案内でバスに乗りプエノスアイレスの観光に出かけ、高速道路を都心へと向かうが、沿線の景色はどこか活気がなくうら寂しい。

高速道路を降り、世界一広い通りとの「七月九日大通」に入るが、土曜日のせいかな人も少なく活気がなく、街の建物も手入れがあまり行き届いていない。

その後、ラ・プラタ川河畔のレストランで名物のアサード（ジャンボ・サーロイン・ステーキ）を食べた後、ラ・プラタ川河畔を散策。ラ・プラタとは「銀の川」との意味で上流で銀を産出したことによるとか、その川幅は広く対岸が見えず唯水平線が見えるだけの所もあり、河口の最も川幅がある所は大阪・名古屋間に匹敵する二〇〇kmにも及ぶとのこと。初めてこの地に来たスペイン人がこの川を海と間違え「塩のない海？」と訝ったのも肯ける。

水は茶色で水量が豊か、流れはかなり激しく所々に水道水等用水の取入口との塔の様な建物が



水面に突き出ている。多くの人が釣りをしており、鯰の大きなのを釣ったのを見せられる。

散策の後、明日イグナスへ向け飛び立つ国内線向空港やパレルモ公園の脇を通り抜け、ペロン元大統領の妻エビータの墓があるレコレータ墓地（此処の墓は宮殿の様に豪華で観光バスも一部立寄るとのこと）の側を通り、各国の大使官邸等が並ぶレコレータ地区を通り抜け、再び「七月九日大通」に戻り、パリ・オペラ座、ミラノ・スカラ座と並び世界三大オペラ劇場の一つと言われたコロソ劇場に立寄るが、中には入らず外観だけ見る。建物の外観はウィーン国立歌劇場に似ており、その装飾はより華麗だが手入れが今一つ行き届かず、うらぶれた感じがし、どこか儚さが漂う。

次にエジプトから運んだ白いオベリスコの横を通り「五月広場」で下車、大統領府（カーサ・ロサーダIIピンクハウス）を外から見ることがこのピンクハウスのペランダでペロンとエビータが演説を行い大喝采をあげたとのこと。同じく「五月広場」にある大聖堂（メトロポリターナ・カテドラル）に入りサン・マルチン將軍の柩に詣で、將軍が南米諸国の独立に大きな足跡を残していることを知る。

その後タンゴ発祥の地とのボカ地区に行く、ここは嘗てヨーロッパからの玄関口として大いに栄え、労働者、船乗り、移民等があふれ、彼らのたむろする酒場等からタンゴが生まれたとのこと、彼らがたむろした路地（カミニート）が保存



ボカ地区のタンゴ広場で



ラプラタ川を背に

され今や観光地になっており、ここで土産物屋をひやかし、街頭でタンゴを踊っているのを見ながら、カミニートを散策し、タンゴのCDを買う。

次に新港地区（ブエトロ・マデーロ地区）を通りサン・マルチン広場に至り、しばし自由時間。新港地区からこの辺りにかけては高層建築も多いが、景気が悪いせいいかどの建物もあまり手入が行き届いていない。

街きつての繁華街フロリダ通りは活気があり賑わっていたが、これはと思うダンディーなポルテーニャ（典型的なアルゼンチンの都会っ子）には出会わないのは残念。

散策の後午後四時すぎホテル「NHフロリダ」に入るがスタンダードクラスのホテルとしてはまずまず。

午後八時オプシヨンのタンゲラに向けバスで出発、夜のブエノスアイレスの街は拙い部分が闇に隠され、照明もなかなか風情があり、味わいのある街に変身しているのには驚く。

タンゲラは「ラ・ベнта（風）」と言い、「セノル・タンゴ」、「カサ・ブランカ」と並ぶ有名店とのことでタンゴの他にフォルクローレもやる店とのこと、土曜日のせいか店の入りは盛況だが、最初に食事が出たがこれがいけない、シエフのサラダとは野菜の千切りにドレッシングを掛けただけ、肉はゴムの様に硬く一口で止め、ひたすら飲み放題のワインをちびりちびり。

シヨは後半に入つてのファンダリ・エンソ楽団にいたベテラン・バンドネオン奏者を軸としたバンドネオンの掛合いが良く、日本の剣劇座長大会の座長同士の掛合を彷彿させるような泥臭いが迫力ある演奏、それにしてもオプシヨン代が一人一八、〇〇〇円は高すぎる。



バンドネオンの競演

午後十一時頃終了、帰途に着く、明朝四時半モーニングコールとの由。

十一月三十日(日)

午前六時ホテルを出発、国内線空港に向かい、アメリカン・ファルコン便にてイグアスへ向け出発(時間約一時間四十五分)眼下に蛇行するラプラタ川、グリーンと茶のパッチ・ワークを織りなす様に森や畑、パンパ(大草原)がはるか彼方にまで広がっている。そのうち彼方に水煙がかすかに見え、飛行機は無事プエルト・イグアス空港に着陸。

空港にはガイドのHさんが出迎え、彼の案内でバスに乗りトロッコ列車の駅に向かうが、車中のHさんの話では、この辺りは以前はコーヒーの栽培が盛んであったが霜害で全滅、それ以後栽培はされていないとのこと。

Hさんは昭和五十一年頃此の地に来た移民一世でいろいろと苦労したらしいが、昭和五十一年と言えば移民も最後の頃以前の移民と違い日本も豊かになってからで、何か大きな夢を持ってこの地に来たに相違なく、彼の話の節々にその名残を留めている。

イグアスの名は先住民の言葉に由来し、「igu」は「水」を、「azu」は「壮大なものへの驚嘆」を意味し滝幅4km、最大落差80m、大小三〇〇余の滝からなり、毎秒六万五〇〇〇トンの水量を誇る世界最大級のスケールで、「悪魔の喉笛」はその中でも最大の滝で、アルゼンチン側からブラジル側へと凄まじい勢いで流れ落ちているとのこと。



イグアスの滝(アルゼンチン側)を背にした妻